電子書籍を考えるQ

前田年昭　r-mae@kobe-du.ac.jp

電子書籍の組版を考えるQ

本格的な電子書籍の時代を迎え、電子書籍の組版ルールをどうするのかという問いが投げかけられています。

印刷物の組版ルールは、読みやすくかつ見栄えが良くなるように工夫され、長年にわたって築き上げられてきました。電子書籍がその文化を吸収することはとても大切なことですが、一方で電子書籍には、読み手の側が自由にレイアウトを変更できたり*、紙よりも低解像度であったりといった印刷物とは異なる特性があります。

今求められていることは、印刷物と電子書籍はどこが似ていてどこが違うのかを明らかにし、そのうえで電子書籍の望ましい組版ルールを作っていくことではないでしょうか。

※昨年八月八日に東京で標記のシンポジウムが開かれ、その内容はウェブで公開されている。
http://moji.gr.jp/gakkou/kouza/ebook-typo/

何を捨て何を進化させるのか（大塚英志）

恐らく大抵の人たちが気づいているようにここの二年くらいでCDショップが街中から次々と、それは恐ろしいほどに姿を消しました。DVDショップやコーナーも同様です。同じように本屋もまたけっこう劇的に消えていくんだろうな、ということは出版界の内側にいなくても、例えば朝の電車の中で文庫本やまんが雑誌を読んでいる人の数と、携帯をいじったりiPodで音楽を聴いている人の数を数えてみるだけでも実感できます。多分「紙の本」は完全に消滅はしないけれど今でもアナログ盤のレコードを好む人がいるように特殊な存在に変わっていくのだ、と本当は皆、うっすらと感じているはずです。（中略）まんがが「紙」から出ていって電子メディアに移行する運命を本気で受け入れようとするのなら、「紙のまんが」の中で発展してきたまんがの文法や手法のうち、いったい何を捨て何を進化させるのか真剣に考えるべきなのです。（中略）

：「見開き」問題に戻れば、そもそも電子メディアにおいて「ページ」は見開きなのか一ページ単位なのか、あるいはコマ単位になってしまうのか、もしくはWEBから導き出される別のページの概念が本当はあるんじゃないか、と考える必要があります。（中略）WEBにまんがの一部が移動していくことはもう避けられません。一つだけいえるのは、そこで何か新しい別のまんがの形が誕生することを恐れない方がいい、ということです。

大塚英志『手塚治虫が生きていたら電子コミックをどう描いていただろう』徳間書店　二〇一一年

和文組版の歴史に電子書籍は何をもたらすのか（前田年昭）

「和文組版の基本ルール」は不変ではないが、変化はゆるやかなものである

文字組版とは文字を排列する技芸である。

府川充男さんは、タイポグラフィは文字と組版システムと組版規則との〝すでにある出来合いの〟それぞれの組み合せのなかにのみあり、それゆえ本質的に保守的だと指摘。私はかつて組版の変化は言葉の歴史的な生命力、創造力の現れであり、「ゆがみ」や「乱れ」としてでなく変動一定着一変動を繰り返していくさまをそのまま見つめることを強く〝組版とは本来、動的なものである〟と述べた。

組版はたえざる変化のなかにある。伝統と革新、緩急の時間幅は、文字、組版システム、組版規則のそれぞれに別であって同一ではない。

和文の表記史を考えるとき、現在の漢字仮名交じり文を「完成されたもの」として固定的に見るのは歴史的な見方を欠く。中世までの漢字文、仮名文が、近世に候文としていったん定着し、近世末から近代にかけての句読点の発明に助けられて漢字仮名交じり文の現在に至っているのである。（中略）

結論を先取りしていえば、技術が変わったからといって「和文組版の基本ルール」は変わらない。不変固定という意味ではなく、変化が時間的にゆるやかなのである。「新たな組版ルールを求めて」も新しいルールなどない。いま、電子書籍とともに姿を現そうとしているのは〝新しい表現〟なのである。

電子書籍の特徴は頁と版面の溶解、文字サイズと字詰めの不確定にある

ここから導き出される教訓は何か。一行三十数文字から約四十文字までの、紙の、書籍を対象にしたJIS X 4051のルビ組版の「ルール」をそのまま電子書籍にあてはめることはかなり難しいということである。電子書籍にあっては、文字サイズは本文もルビ文字も決め打ちはできず、字詰めも新聞組版並みの十数文字から約三十文字まで幅があるからである。決定には発信側（作り手）だけでなく受信側（読み手）も権限を持つ。そしてこれは電子書籍のよい面にもなりうる側面なのである。

日本の電子出版の先駆者であるボイジャーの萩野正昭さんが『OnDeck』三号（二〇一一年二月三日号）で、電子出版は「リフローするから（中略）組版ルールに依拠するのは間違い」と述べている。この意味を真剣に捉え考える必要があると私は考えている。

継続なものである（前田年昭）

文字サイズ、行長（字詰め）、版面、対象文書

リフロー云々と浮かれ騒ぐ人々の言い分とは別のところで、組版とは本来動的なものである。府川充男氏が端的に提示されているように、出来合いの文字と出来合いの組版システムが、出来合いの組版用紙の組合せの中でのみ成立する。

版面、文字サイズ（字詰）、行長（字詰め）は判型のなかで動的に決定される。与件SAPCOLとしていい、JIS X 4051というが、字詰めとして最少（最短）三十文字弱、最多（最長）四十数文字の〝本文組〟を対象としてはじめて解明されるべきである。これを忘れて他の条件下で無批判に援用することは慎まなければならない。

組版の読みやすさ、美しさを条件付ける半角約物の調整についても同様である。十字詰未満の行長は食い込み部分であれば避けるべきであろう。あまりに例外処理が発生しすぎるからである。

継続なものである（前田年昭）

府川充男氏が端的に提示されているように、出来合いの文字と出来合いの組版システムが、出来合いの組版用紙の組合せの中でのみ成立する。

組版とは本来動的なものである。リフロー云々と浮かれ騒ぐ人々の言い分とは別のところで、組版とは本来動的なものである。

「文字」というが、解釈と構成と表記の問題で動的に決定されるべきである。まず、解釈は、対象文書の性格、目的、読み手の想定などを考慮して、文字サイズ、行長（字詰め）、版面、判型などを決定する。

次に、構成は、文字サイズ、行長（字詰め）、版面、判型などを、相互に関係させながら、文字サイズ、行長（字詰め）、版面、判型などを決定する。

表記は、文字サイズ、行長（字詰め）、版面、判型などを、相互に関係させながら、文字サイズ、行長（字詰め）、版面、判型などを決定する。

これらの決定は書記言語の慣習に従って、可能な限り、機械的に処理されるべきである。言い換えれば、これらの決定は、機械的に処理されるべきである。

「機械的に処理されるべきである」ということは、「機械的に決まる」ということである。

「機械的に決まる」ということは、「機械的に処理されるべきである」ということ